

古代エジプト末期王朝時代におけるメンフィスの動物信仰について

Animal Cults in Memphis in the Late Period of Ancient Egypt

清水 麻里奈
Shimizu Marina

摘要

The goal of this paper was to clarify when Animal Cults began as an element of revival in Memphis in the Late Period (664–332 B.C.). First, the discussion centred on mortuary chapel-tombs related to Animal Cults in Saqqara, including Serapeum, Anoubieion, Boubastieon and the Sacred Animal Complex. These buildings played a role in the residence of the gods and reflected the importance of Animal Cults in ancient Egyptian society. Next, the dates for the construction of temples and catacombs were considered. While shrines and temples were constructed in the Twenty-Sixth Dynasty (672–525 B.C.), also known as the Saite Dynasty, catacombs were not always built at the same time.

The results of the analysis revealed that in Memphis, Animal Cults originated from worship of the Apis bull (Sacred Animals). Votive Mummies began in the Twenty-Eighth to the Thirtieth Dynasty. The sacred animals interred in the special cemeteries were confirmed in the Twenty-sixth Dynasty on the Greater Vaults (Des Grands Souterrains). And so, based on the assumption that the propensity for votive mummies defines the Animal Cults in Memphis, it was concluded that such cults underwent a revival in the Late Period after the Twenty-Sixth Dynasty, flourished and became deeply rooted thereafter.

キーワード: 末期王朝 メンフィス 動物信仰 *Late Period Memphis Animal Cults*

1. はじめに

古代エジプト末期王朝時代(前 664 年～前 332 年)の王たちは、芸術、建築、文学など様々な領域において、文芸復興として知られる古典文化の再興に力を注いだことが一般に知られている¹。アッシリアによって破壊された神殿レリーフの復元や、エジプト各地で展開された古い時代の様式に則った新たな神殿の建築は、この「文芸復興」がいかに広範な現象であったかを雄弁に物語っている。そして、このような文化的潮流は、続くプトレマイオス朝においても継承されていくことになる。

その中でも、末期王朝時代の「文芸復興」の痕跡をもっとも色濃く残しているのが、古代エジプト古王国時代の首都であり、その後も政治的・宗教的中心地として栄えたメンフィスである。末期王朝時代のメンフィスでは、優れたアーティストの活躍を通じて活発な建築活動が展開されていただけでなく(Myśliwiec 2000: 118, 127-130)、王家による宗教政策において重要な位置を占める聖牛アピス信仰が盛んに行われていた(Smith 1984: 412-428)。しかし、メンフィスで神聖視されていたのは、アピス神だけではない。末期王朝時代以降にメンフィスで構築された建造物は、様々な動物が当時の人々の崇拝の対象となっていたことを示している。

そこで、本論文では、「文芸復興」という時代の思潮のなかに動物信仰を再定位することによって、動物信仰と関連する葬祭殿墓²を対象とした動物信仰盛行の文化的背景について検討していくことにする。

2. 先行研究

2. 1. 動物信仰

古代エジプト人と動物は、宗教的にも社会的にも深く結びついていた。動物は家畜や食料として日常生活においてなくてはならない存在であったと共に、彼らの信仰する神を具現化した存在でもあった。ウシのような特定の神性を有する動物は、死後にミイラ化され儀礼が執り行われて専用の埋葬施設へと埋葬されるなどの特別な扱いを受けていた(Dodson 2009: 1-8)。その一方で、ウシ以外の動物もエジプト国内において神性視されており、ミイラとなり動物ごとに専用の埋葬施設が造られて埋葬されたことが広く知られている(Hdt.2.65-76)。

動物考古学者のサリマ・イクラムは、古代エジプトにおける動物ミイラを①愛玩動物、②供物用動物、③神聖動物、④奉納用動物の4種類に分類している(Ikram 2005: 1-15)。愛玩動物のミイラは、ペットとして被葬者と同じ棺に埋葬された動物や被葬者の威信財としての役割を果たした動物であり、比較的古い段階から確認できる。供物用のミイラは、ツタンカーメンの墓において確認できるような、被葬者の永遠の食物としてウシなどの肉をミイラ化した動物のミイラである。神聖動物は生きていたときからその動物を神として崇め、寿命又は儀礼によって死後にミイラ化され、専用の埋葬施設に埋葬された動物である。奉納用動物はある一定の神々へ捧げられた動物であり、莫大な数の動物ミイラとして埋葬されていること、人為的な殺害が行われることによって自然死を迎えていない点が他の動物のミイラとは異なっている。また、神聖動物と奉納用動物は特別な神性を有する動物であり、神殿が建設されてその近辺に埋葬されるなど、他の動物ミイラとは異なる格別の扱いを受けていたと提唱している。

このような特別な神性を有する動物が大量に埋葬されたことから、末期王朝時代からプトレマイオス朝時代の間に古代エジプトにおける動物信仰は頂点に達したと言われている(Clarysse 2010: 278-279)。紀元前5世紀の歴史家であるヘロドトスは、エジプトにおける動物は家畜や野生動物にかかわらず全てが神性視されていることを伝えており、エジプトにおいて動物を殺したものは死刑もしくは祭司の課した罰を償わなければならないと述べている(Hdt.2.65)。動物の死後に関しては、ネコはネコの姿をしたバステト神が崇拝されている都市ブバステイスにおいてミイラ化して葬ること、野ネズミと鷹はプトへ、トキはヘルモポリスの埋葬所まで運んでから埋葬することを伝えている。他方で、イヌは持主が自分の町において埋葬すること、オオカミやクマは死んでいた場所にそのまま葬るとことを記しており、動物に対する埋葬が厳格に執り行われていたことが読み取れる(Hdt.2.67)。

実際に、これらの動物墓地は北のアレクサンドリアから南のコム・オンボまでのエジプト全土において散見される(Ikram 2005: xviii-xx)。また、それぞれの墓地に埋葬されている動物は、それぞれの地方神を具現化した動物であった。たとえば、上エジプト第13ノモスであるリコポリスにおいては、古王国時代から信仰されていたウプウアト神とアヌビス神を具現化したイヌのミイラと葬祭殿墓が報告されており(Kitagawa 2016)、上エジプト第15ノモスであるヘルモポリスにおいては、トト神を具現化したヒヒとトキのミイラと葬祭殿墓が確認できる(Kessler and el-Din 2005)。どちらの墓も「奉納用動物」のための墓であり、末期王朝時代に使用された墓で

ある。他方で、「神聖動物」の墓に関しては、サッカラに埋葬されている聖牛アピスやアルマントの聖牛ブキスのための墓が該当する。サッカラのセラペウムを例にとると、新王国時代第18王朝から聖牛アピスの埋葬が行われており、奉納用動物の墓と神聖動物の墓ではその起源が異なっている。

しかし、奉納用動物と神聖動物の動物ミイラは、異なる神性を有している動物であり、其々を埋葬している施設も異なっている。また、奉納用動物の埋葬数は数百万単位で異なっていること、神聖動物の埋葬は新王国時代から行われていることから、末期王朝時代における動物信仰について論考する際に同一の動物信仰として扱うべきではないと考えられよう。そのため、動物信仰を論考するにあたって、本論においては奉納用動物の高揚期こそが動物信仰の萌芽期であると捉え、具体的に論じていくこととする。

2. 2. 末期王朝時代

末期王朝時代（表1）は第26王朝から第31王朝までの約330年であり、エジプト国内において数々の反乱が見られ、地中海世界においても広域な戦争が幾度となく行われていた激動の時代である。末期王朝時代以前のエジプトは南北に分裂しており、この激動の時代を統治するために王たちは様々な政策を行ってきた。たとえば、第26王朝（サイス朝）の王であるプサンメティコス1世は、州が中央政府と密接に関わる中央集権を確立することに精力を費やした。また建築活動も多く行っており、その活動の痕跡はサイスのみならず、メンフィス、テーベ、ヘリオポリス、エスナ、エドフなど、エジプト中の建造物において確認できる(Perdu 2010: 141-144)。アプリエスは、古王国第6王朝の文書と形態が類似した法令を發布しており(Gozzoli 2006: 103-9)、アマシスの治世においても、プサンメティコス1世のように行政改革や神殿建築を行ったことが知られている(Perdu 2010: 147-149)。また、第26王朝の王たちは古王国時代を手本とした美術表現を積極的に執り行っており、建築事業や経済政策に関しても古王国時代の模倣を行っていることから、サイス朝による文芸復興はサイスルネサンスと呼称されている(Smith 1984: 418)。

さらに、第1次ペルシア人王朝と称される第27王朝においても、エジプト全土において第26王朝を彷彿とさせる文芸復興を行っており、続く第28王朝の王アミルタイオスと第30王朝の王ネクタネボ1世および2世に関しても、サイスルネサンスを彷彿とさせる文芸復興を行っていたことが知られている(Myśliwiec 2000: 169-176, Gozzoli 2006: 103-9)。

このように、末期王朝時代を通して広範囲に行われた文芸復興であるが、古王国時代の首都であるメンフィスにおいてはその地方神であるプタハ神に捧げた神殿³の再建築が確認できる(Jones 1990)。墓地区サッカラにおいては、アヌビス神やバステト神などの様々な神へ捧げられた神殿が建立され、プタハ神の神性を有する神聖動物であるウシのみならず、イヌ、ネコ、ハヤブサ、トキ、ヒヒのような多種多様な動物ミイラが埋葬された (Davies and Smith 1997, Nicholson 2005)。

これらの動物のミイラは、主に新しく建立された神殿に付随する墓地に埋葬された。当該域における動物墓地について、スペンサーは個々の動物に結びつく信仰の中心地から遠く離れてこれらの動物のために墓が発達し得たと解釈しており、エジプトの伝統的文化の優越性を主張するためのエジプト人による最後の努力として見なしている(Spencer 1982: 226-249)。実際、特定の動物に関しては数百万を超える莫大な数の奉納用動物ミイラとして埋葬されており、サッ

カラにおける動物信仰が大規模なものであったことは想像に難くない。

末期王朝時代における動物信仰の由緒に関しては、イクラムがリビア人やヌビア人、アッシリア人などの外国人支配下において、エジプト人としての文化や伝統的な信仰の強さを主張していたことに由来するのではないかと指摘している(Ikram 2005: 7-8)。また、ドドソンもリビア人とペルシア人のような外国人支配に服従し、エジプトが地中海世界へ組み込まれた時、動物信仰はアイデンティティの象徴である典型的なエジプトとしての信仰概念に起因するのではないかと論じており(Dodson 2012)、諸外国との関わり合いに起因すると主張している。さらにケセラーはこのような大規模な動物信仰は支配者との結びつきによると論及している(Kessler 1989)。末期王朝時代の王たちが古代エジプト宗教の復興を行っていることから(Smith 1984: 412-428)、文芸復興の一環として動物信仰が執り行われたと理解することは可能であろう。

しかし、末期王朝時代は330年ほど続く動乱の時代であり各王朝の王たちが文芸復興を行っていることから、より詳細な動物信仰の高揚期に関する考察が必要であると考えられる。ニコルソンはサッカラにおける動物信仰の高揚は末期王朝終焉期、とくに第30王朝であると指摘しているが(Nicholson 2005: 49)、果たして本当に第30王朝であろうか。ここでは主にメンフィスにおいて確認できる葬祭殿墓から、末期王朝時代のどの時期に動物信仰が興隆したのかについて検討していきたい。

なお、本論では文芸復興を以下のように捉えることとする。復興は一度衰えたものが再び盛んになることを意味するため、古代エジプトにおいて初期王朝時代に動物のための葬祭殿墓は建立されていない点から、動物信仰に対して使用することは一見不自然のように見受けられるであろう。しかし、古代エジプト人が動物を信仰していたわけではなく、動物の持つ神性を崇拝していたこと(Te Velde 1980)を考慮すれば、初期王朝時代から地方別に信仰されていた信仰の高揚を文芸復興の一要因として見なすことができる。そのため、広義における文芸復興の一環として動物信仰の復興が行われたと解釈することで、古代エジプトにおける美術、建築および信仰の復興を目指した文化運動として文芸復興を定義する。

3. メンフィスの葬祭殿墓

メンフィス(図1)は、現在のエジプトの首都カイロから約25キロ南下したナイル川西岸に位置する。この「メンフィス」という地名は、古王国第6王朝のペピ1世のピラミッドと葬祭神殿に書かれているメンネフェルのギリシア語読み由来する(古谷野 1998:47-48, 近藤・河合 2011:19)。当該地区は第1王朝開闢以降にエジプトの首都となり、中王国時代以降に「アネク・タウイ＝二国を生きるもの(近藤・河合 2011:19)」の名称を持ち、新王国時代には下エジプトの行政的中心地として機能し続け、政治や宗教の中心地であり続けた。

本論において取り扱う地域は、ナイル川西岸の沖積低地内に位置するメンフィス市街地の西側低位砂漠「サッカラネクロポリス」である。メンフィス市街地は、メンフィスの主神プタハを祀るプタハ神殿において神聖動物である聖牛アピスの飼育が行われていたため、末期王朝時代における信仰を対象とした際には必ず扱わなければならない地域であろう。しかし、サッカラネクロポリスは論考対象とした奉納用動物が多く埋葬された地域であり、末期王朝時代の王たちによる活動痕跡についても確認できるため、本論においてはメンフィスにおけるサッカラネクロポリスを対象とする。

この「サッカラ」の名はプタハ神と密接な関係であるソカル神に由来する。サッカラには古

王国第3王朝を中心とするピラミッド群が多数存在し、古くからメンフィスのネクロポリスとして機能していた。当該域において、末期王朝時代以降に使用が確認できる動物信仰に関連する葬祭殿墓はセラペウム、アヌビエイオン、ブバステイオン、アニマルコンプレックスである。上記の葬祭殿墓全てに共通する特徴は、地上部の神殿に周壁を有し、其々に聖域が確認できること、個々の神殿に関連する神々の神性を有する動物が埋葬されていることである(Davies and Smith 2005, Davies 2006)。

3. 1. セラペウム

セラペウムはサッカラ地区西部に位置する、聖牛アピスが埋葬された葬祭殿墓である。セラペウムの上部構造にはいくつもの神殿と聖域が構築されていたが、現在は地下墓地へと繋がる階段とその周辺の神殿と聖域の一部が残存しているのみである。これらは19世紀のマリエットによる発掘調査の際に発見された(Mariette and Maspero 1882)。地上部には、ネクタネボ2世の治世に建設されたアピス神に捧げた2基の神殿が東西に確認されており、神殿南部に恐らくアシュタルテ神殿が立地していたことが文字史料⁴から論考されているが(Thompson 2012: 84,197-246)、プトレマイオス朝時代のものであるため、末期王朝時代におけるセラペウム上部構造南部域の詳細は不明瞭である。

一方、セラペウムにおける雄ウシのカタコンベは新王国時代以降に構築されており、次の3箇所に区分されている。「孤立した墓(Des Tombes Isolées, The Isolated Tombs)」、「小型のヴォールト(Des Petits Souterrains, The Lesser Vaults)」、「大型のヴォールト(Des Grands Souterrains, The Greater Vaults)」である(Dodson 2005: 76-89)。The Isolated Tombsは主に新王国18王朝時代に使用が確認できる墓であり、それぞれの墓は散発的に構築されている。The Lesser Vaultsでは、同じく第18王朝時代から末期王朝時代にかけて使用され、一つの主軸に沿って両側に聖牛アピスの埋葬部屋が位置する。

大型のヴォールトは末期王朝時代からプトレマイオス朝時代にかけて使用された墓であり、末期王朝時代とプトレマイオス朝時代の墓は西部と東部に位置する関係から明確に区別できる。セラペウム出土の文字史料に聖牛アピスの生まれた日と発見された場所、メンフィスに来た日付と死んだ日付が記載されていることから(Thompson 2012: 180)、聖牛アピスのヴォールトへの埋葬順序およびカタコンベの構築順序と構築方法についての指摘がなされている(Dodson 2005)。その中でもセラペウムにおいて興味深い点は、大型のヴォールトにおける聖牛アピスの埋葬がプサンメティコス1世によって開始されていることである(Dodson 2005: 84-89)。碑文史料によれば、大型のヴォールト最西部は第26王朝時代の埋葬区域に該当し、当該域における最初の聖牛アピスの死亡年はプサンメティコス1世の治世52年であった(Mariette and Maspero 1882: 190, Devauchelle 1994: 100)。この史料より、大型のヴォールトにおける最初の埋葬はプサンメティコス1世の治世に生存し、飼育され、埋葬された聖牛であることが読み取れる。また、末期王朝時代の初期から従来の埋葬場所とは異なった位置に聖牛アピスの埋葬が行われていることは、メンフィスにおける聖牛アピス信仰が第26王朝以降において何らかの形で変化したことを示唆している。

3. 2. アヌビエイオン

アヌビエイオンはサッカラ地区東部に位置し、アヌビス神の主神殿であった(Nicholson et al

2013 ,Nicholson et al 2015)。この葬祭殿墓の上部構造は、古王国第6王朝テティ王のピラミッドの東側に建立された。城壁内には周壁内の南部、中部、北部に3つの神殿が確認されており、その建設時期は主に第26王朝とプトレマイオス朝時代であった⁵。中部神殿に関しては、石灰岩の断片と銘碑から、アマシスの治世に建設されたアヌビスのための主神殿として論考されている(Davies and Smith 1997: 114)。北部神殿は、門が確認できることから神殿として認知されているが、神殿それ自体に関しては基礎部分が残存しているのみであり、用途や施設については不明である(Davies and Smith 1997)。また、アヌビエイオンの周辺には末期王朝時代の高官や神官の墓地が多く発見されており、当時の人々は宗教中心地付近に埋葬されることを望んでいたと指摘している(Smith 1984: 413-415)。

アヌビエイオンの下部構造に該当するカタコンベには、アヌビス神の神聖動物であるイヌとジャッカルが埋葬されている。アヌビス神のためのカタコンベは、大小2基のドッグカタコンベが発見されており、それぞれの使用時期は新王国時代(前1150-前1069年)と末期王朝からローマ初期(前747-前30年以降)と考えられている(Nicholson et al 2013: 83-84)。しかし、小さなカタコンベは1992年の地震によって崩落してしまったため、19世紀末のジャック・ド・モルガンによる報告書に依拠するのみであるが(De Morgan 1897)、墓の平面図に誤りが多いなどの問題が残されている。また、大きなドッグカタコンベに関しても末期王朝時代のいつから使用が始まったかについては不明であるが、英国隊が調査を進めているため、今後新たな見解が期待される。

3. 3. ブバステイオン

ブバステイオンはサッカラ地区東部に位置し、プトレマイオス朝時代のギリシア人によって「バステト女神に捧げられた聖域」としてブバステイオンと名付けられた(Zivie 2005: 108)。この葬祭殿墓は古王国第5王朝ウセルカーエフ王のピラミッドの東側に位置し、ネコの埋葬地を地上部に有している。地上部分には、末期王朝時代に建設された煉瓦の周壁が南部と西部に残っているが、周壁内の構造物にはほとんど残っておらず、詳細な時期については不明である(Davies and Smith 1997: 112-114 , Zivie 2005: 110-111)。

また、ネコの埋葬は他の葬祭殿墓のように地下墓地ではなく、ブバステイオンの東側と南側に位置する新王国時代の人間の墓である岩窟墓に埋葬された。この岩窟墓はネコの埋葬地として再利用され(Davies 2005, Zivie 2005: 110)、紀元前500年以降の末期王朝時代からプトレマイオス朝時代において使用されていた。また、ネコのミイラは木製や石製、石灰岩製の棺にアミュレットや奉納用のオブジェと共に埋納され、一部ライオンの骨も発見されている(Zivie 2005: 108-110, 114)。

3. 4. アニマルコンプレックス

アニマルコンプレックスはサッカラの北部に位置する葬祭殿墓であり、近年、英国隊によって報告書が出版されたため最も情報量の多い葬祭殿墓である。スミスは1976年のプレリミナリーレポートにおいて、アニマルコンプレックスにおける構築段階を次の6つの段階に区分している。(1)中央神殿の聖域と門および北の壁に関しては第26王朝末に構築された。(2)アピスのカタコンベと神殿段丘部の主な周壁に関しては、第27王朝よりも後に建設された。(3)ネクタネボ2世の治世において、中央神殿の中庭、ヒヒの門とヒヒのカタコンベ、南の周壁、聖道とそれに属する土手道が建設された。(4)主神殿周壁の西側と南側の引き上げとハヤブサ複合建

造物の建設とハヤブサのカタコンベの構築は(3)よりも後に建設された。(5)神殿複合体の放棄に関しては物質証拠が乏しいため、紀元 1-5 世紀の間という長期的な広がりを持つ。(6) 5 世紀までの間に、廃墟と化したアニマルコンプレックスにキリスト教徒が定住した(Smith 1976)。このプレリミナリーレポートは、アニマルコンプレックスの上部構造の建築は第 26 王朝の末期から始まり、第 30 王朝の王であるネクタネボ 2 世の治世においてアピス神とその母イシス神に捧げた神殿が構築され、中庭と塔門の装飾も施された後に、プトレマイオス朝時代においても増築が繰り返されたことを記している。

アニマルコンプレックスに不随する地下墓地は、北東部に位置する雄牛アピスの母牛のカタコンベ(イセウム⁶)、東部に位置するヒヒのカタコンベ、南東部に位置するハヤブサのカタコンベである。さらに、アニマルコンプレックスの南北にはトキのカタコンベが建立されており、葬祭殿墓と直接的な繋がりはないものの、距離的な近さとアニマルコンプレックスにおいてヒヒが埋葬されていることから、古王国時代第 3 王朝の神官イムホテプとの密接な関連性が窺える。

このアニマルコンプレックスは、1964 年から 1971 年までイギリス人のエジプト学者 W.B.エメリーによって神官イムホテプの墓を探すことを目的として調査された。1950 年代後半に古王国時代第 3 王朝の階段ピラミッド周辺から約 700m の地点に動物のミイラが入った壺が発見されたことから、当該域においてアスクレピオンとイムホテプの墓が発見できると推測して調査に至った。このアニマルコンプレックスにおいては 400 万羽のトキ、50 万羽のハヤブサ、少なくとも 500 体ものヒヒ、いくつかの神聖なウシ、神殿複合体、4000 点の奉納用の像、約 1000 点のデモティック史料がギリシア語、アラム語、コプト語、カリア語、アラビア語、そしてまだ同定されていないギリシア語で書かれた手紙と共に発見されている(Ray 1978: 151)。

アニマルコンプレックスにおける 3 つの地下墓地の使用年代に関する考察は、イセウムから出土している碑文史料とそれぞれの遺構から出土している考古学的遺物⁷に基づいて、以下のように論考されている。イセウムは西から東へと構築され、第 29 王朝の王であるアコリスの治世 1 年(前 393 年)からプトレマイオス朝時代のクレオパトラの治世 11 年(前 41 年)まで使用された(MoA M5-6, MoA 70/19)。ヒヒのカタコンベは、カタコンベの上部から下部へかけて構築され、前 404-前 40 年まで使用された(Davies 2006: 84)。また、ハヤブサのカタコンベは北から南へ構築され、前 360 年-前 30 年までの期間に使用された(Davies and Smith 2005: 40)。これらの論考から、3 つのカタコンベの主な使用時期は第 28 王朝—第 30 王朝の間から、プトレマイオス朝時代末までであったと結論付けられる。そのため、アニマルコンプレックスにおいては上部構造とカタコンベの構築時期が明らかに異なっていると判断できる。

4. 考察

メンフィスにおける動物信仰については、イクラムやドドソンが既に提唱しているように、末期王朝時代に起因することが確認できた。しかしながら、この動物信仰が第 26 王朝のサイスルネサンスとしての文芸復興に由来するのか、後続する王朝における文芸復興として動物信仰が確立したのかを明確にしなければ、動物信仰盛行の文化的背景に迫ることができない。そこで、サッカラの葬祭殿墓の上部構造と下部構造の使用時期を照合することによって、当該域における動物信仰の高揚期について検討してみたい。

第3章において概観した葬祭殿墓の末期王朝時代における使用上限期は、次のようにまとめることができる。①セラペウムの上部構造は第26王朝であり、下部構造は第26王朝プサンメティコス1世の治世20/21年である。②アヌビエイオンの上部構造は第26王朝アマシスの治世であり、下部構造は末期王朝時代である。③ブバステイオンに関しては末期王朝時代に建立された葬祭殿墓であり、ネコの埋葬は紀元前500年よりも後の時代である。④アニマルコンプレックスの上部構造は第26王朝であり、下部構造は第28王朝から第30王朝にかけてである。

上記より、奉納用動物が埋葬されている葬祭殿墓（アヌビエイオン、ブバステイオン、アニマルコンプレックス）に着目した時、葬祭殿墓の上部構造と下部構造の構築は必ずしも同時期ではないことが推察できる。つまり、葬祭殿墓の上部構造は第26王朝時代に建立されているが、奉納用動物の埋葬墓地は必ずしも第26王朝時代ではなかった。

しかし、仮に第26王朝以降に奉納用動物の埋葬が行われたのであれば、第26王朝以降のどの時期において動物信仰の興隆がみられるのであろうか。現時点において詳細な遺構および遺物の分析が行われており、絶対年代が判明しているのはアニマルコンプレックスにおけるカタコンベ（イセウム、ヒヒのカタコンベ、ハヤブサのカタコンベ）であり、それらの史料からより詳細な動物信仰の高揚期を把握することができる。そして、これらの資料をもとに論考した時、末期王朝第28王朝王および第30王朝において奉納用動物の埋葬が行われ始めたことが判明した。他方で、アヌビエイオンとブバステイオンにおける奉納用動物の埋葬に関しては、末期王朝時代以降における埋葬であると論考されているが、詳細な時期は判明していない。一部、モルガンの調査による小さなドッグカタコンベの使用時期は新王国時代であると提唱されているが、近年の調査によって当時の報告書の是非が問われており、モルガン自身がなぜ新王国時代であると指摘した根拠に関しても不明であることから (Nicholson et al 2013)、小さなドッグカタコンベに関しては新王国時代に構築された墓であると断定しがたい。以上より、アニマルコンプレックスの例を顧慮して、奉納用動物の埋葬は概ね第28王朝および第30王朝に始まると考えられよう。

第28王朝および第30王朝において、奉納用動物のための墓地が構築され始めたと考える根拠はメンフィスにおける歴史的な環境から2つ挙げられる。第一に考えられる論拠として、第26王朝の王たちによる動物崇拝に起因する可能性である。第26王朝の王であるプサンメティコス1世は、メンフィス市街地ではプタハ神殿の増築を行っており、サッカラのセラペウムでは新しく大型のヴォールトを構築していることから、聖牛アピス信仰に対して関心を寄せていたことが窺える。ヘロドトスが詳細に伝えるように、おそらく第26王朝の王たちは宗教的・社会的な理由から神聖動物に対して非常に高い関心があったのであろう。そして、動物を神性視する見方が後世にも伝わり、末期王朝時代終焉期のサッカラにおいては、既に崇拝されていた聖牛アピスのみならず、古代エジプトの各地で崇拝されていたネコ、イヌ、ハヤブサやトキなどに対する信仰も行われたと考えられよう。実際、第30王朝の王たちに関しては、サイスルネサンスを彷彿とさせる文芸復興を行っていることが指摘されている (Gozzoli 2006, Perdu 2010)。

次に、末期王朝時代において古王国時代を模範とする文芸復興が成されていることから、古王国時代の神官イムホテプと動物信仰の関連が挙げられる。イムホテプは当該域におけるジョセル王の階段ピラミッドを建設した宰相であり、トキとヒヒを聖獣として末期王朝時代に神格化された人物である (Nicholson 2005: 44-45)。アニマルコンプレックスの地下墓地においては、古王国時代の墓との関連性が論考されており (Nicholson 2005, Davies and Smith 2005)、トキとヒヒのミイラを当該域に埋葬することは、イムホテプとの関連性を強く示すものと指摘されてい

る(Ray 1978: 150)。そのため、このような奉納用動物の埋葬は第 26 王朝の王たちによる文芸復興が、続く末期王朝時代の王たちによって引き継がれ、古王国時代への回帰へ基づいた結果であると理解することができる。これらの論拠より、第 26 王朝よりも後の王朝においても古王国時代に対する古典復興が行われていたと考えることができよう。

なお、本論で概観した 4 つの葬祭殿墓の他にも、未だ発見されていない動物墓地はおそらく存在している。文字史料によれば、その他にもワニや羊のミイラが埋葬されていたことが知られており、現在は確認できないが、末期王朝時代においては他にも葬祭殿墓のような建造物が構築されていた可能性は十分にある。しかし、文字史料の殆どはプトレマイオス朝時代に依拠しており、末期王朝時代に関する史料数は決して多くないため、どのように神殿が機能していたのかについては議論の余地が残される。

5. おわりに

本稿は、末期王朝時代における文芸復興の一要素として動物信仰を取り上げ、動物信仰盛行の文化的背景を明らかにすることを目的とした。対象とした地域は、古代エジプト王朝開闢期からの首都であるメンフィス、とくにその墓地区サッカラである。当該域において確認できる動物信仰と関連する建造物および動物ミイラから、末期王朝時代における動物信仰の由緒に関する検討を行った。

末期王朝時代において確立された動物信仰であるが、既にサッカラにおける動物信仰高揚期は王朝終焉期である第 30 王朝ではないかと指摘されていた。しかし、本論では動物信仰をより詳細に読み解くために、動物ミイラを神聖動物と奉納用動物に区分することで動物ミイラの奉納時期の分析を行った。それによれば、第 26 王朝のサイスルネサンスの一環として、聖牛アピス（神聖動物）の埋葬や葬祭殿の建築を通してメンフィスにおける動物信仰の盛行が行われていた一方で、第 28 王朝から第 30 王朝以降において、猛禽類やヒヒ（奉納用動物）のミイラの埋葬が行われていたことが本論における再検討によって確認できた。神聖動物である動物ミイラの埋葬は新王国時代から行われているため、動物ミイラ埋葬の高揚期こそが末期王朝時代における動物信仰の萌芽期であると考えたとき、奉納用動物の埋葬は第 28 王朝以降であることから、第 30 王朝よりも遡ると考えられる。また、末期王朝時代における文芸復興の源流であるサイスルネサンスの一環として、奉納用動物の埋葬は行われていないことが判明した。つまり、末期王朝時代における動物信仰の興隆はサイス朝よりも後の時代であり、従来考えられていた第 30 王朝に高揚する説よりも遡る結果となった。

以上より、メンフィスにおける動物信仰はサイスルネサンスに端を発したが、深く根付いたのはサイス朝よりも後の時期であることが判明した。また、奉納用動物を対象とした時、末期王朝時代における動物信仰は第 28 王朝から第 30 王朝において興隆することが確認できた。

なお、本論では文芸復興に焦点を当てたため、古王国時代の首都であり末期王朝時代にエジプト各地の地方神が集結した地域であるメンフィスを扱ったが、必ずしも地方における動物信仰が第 28 王朝および第 30 王朝に端を発するとは限らない。そのため、末期王朝時代における動物信仰を研究するにあたっては、メンフィス一地域のみならず、エジプト全土を対象としなければならない。さらに、本論では扱うことのできなかった末期王朝時代に後続するプトレマイオス朝時代においても、動物ミイラの埋葬は続いており、神殿の増築が成されるなどの人々

の活動痕跡が確認できる。プトレマイオス朝時代のメンフィスにおいては、ギリシア文字史料・デモティック文字史料が現存しているため、プタハ神官団や葬祭殿墓で働いていた役人が行っていた動物信仰に関する儀礼にまで踏み込んだ議論が可能であろう。そのため、末期王朝時代以降を対象とした一連の動物信仰に関しても意欲的に取り組む所存である。

注

- (1) 末期王朝時代について簡潔に概観しているのはPerdu 2010である。また、数は多くはないが、碑文史料に基づいた末期王朝時代の変遷についてはGozzoli 2006が詳しい。さらに、考古学的史料に基づいた末期王朝時代についてはMyśliwiec 2000を参照。
- (2) 葬祭殿墓についてはSpencer 1982: 238-242(スペンサー 1984: 279-283)を参照。スペンサーは祭殿墓について、第18王朝から末期王朝時代において確認できる形式であり、上部構造が小さい神殿または祭殿の形をとる建造物のグループについて適応しているため、本論においても葬祭殿墓の名称を使用した。また、当該域における葬祭殿墓は神々の住居としての役割を果たしており、当時社会における動物信仰の重要性を伝える遺構と認知されている(Davies and Smith 1997)。
- (3) プタハ神殿の最初の構築は末期王朝以前であり、考古史料から新王国第19王朝ラメセス2世の治世において大規模な増築活動が確認できる(Malek 1997)。末期王朝時代においては、プサンメティコス1世が南楼門と中庭を建立し(Hdt.2.153)、ネクタネボ2世の治世において主要な修復が行われた(Jones 1990)。
- (4) パピルス資料としてウィルケン (Wilcken 1927)によって編纂されたプトレマイオス朝時代の文書である、*Urkunden der Ptolemaierzeit, Bd. 1, Papyri aus Unterägypten, Berlin, 1922-1927* (=UPZ) が挙げられる。このパピルス集はメンフィスのセラペウムにおけるギリシア人の活動や儀礼について、またアピス神に関して多くの情報を提供してくれる。
- (5) プトレマイオス朝時代においては、ギリシア語やデモティック資料によって、アヌビエイオンは死体防腐処理者の職場且つサッカラネクロポリスの財政の中心地であったと指摘されている(Thompson 2012: 22-24)。
- (6) アピスの母牛のカタコンベ(Mother of Apis Catacomb)を調査したエメリーによってイセウム(the Iseum)と提唱されているため(Emery 1970: 12, Nicholson 2015: 70)、本論においてはアピスの母牛のカタコンベではなくイセウムの名称を使用している。
- (7) たとえば、ハヤブサのカタコンベにおける年代決定は以下のような要因に基づいて行われた。ハヤブサのカタコンベは、一つの埋葬区域ギャラリーの使用が終わった際にそのギャラリーの封鎖作業が行われ、外界との隔絶が成される例が幾つかある。このカタコンベの入口部周辺に構築されたギャラリーには、石灰岩による封が確認できるギャラリーが構築されており、そのギャラリー内部からネクタネボ2世のカルトゥーシュの記載されている青銅製のハヤブサを模した遺物が出土しているため、遺構の最下限期はネクタネボ2世であると論考されている(Davies and Smith 2005: 21-40)。

参考文献

- Chauvet V. Saqqara. In D. Redford (ed.) *The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt*, pp.176-179. Oxford University press: Oxford. 2001.
- Clarysse W. *Egyptian Temples and Priests, Graeco-Roman*. In A. Lloyd(ed.) *A Companion to Ancient Egypt*, pp.274-290. Wiley-Blackwell. 2010.
- Crawford D. J. *Ptolemy, Ptah and Apis in Hellenistic Memphis*. In J. Dorothy (ed.) *Studia Hellenistica*, pp.1-42. Peeters Publishers. 1980.

- Davies S. *The Sacred Animal Necropolis at North Saqqara, Mother of Apis and Baboon Catacombs, the Archaeological Report*. Egypt Exploration Society. 2006.
- Davies S. and H.S. Smith. *The Anubieion at Saqqara 1, The Settlement and the Temple Precinct*. Egypt Exploration Society. 1988.
- *Sacred Animal Temples at Saqqara*. In S. Quirke (ed.) *The Temple in Ancient Egypt, New Discoveries and Recent Research*. pp.112-131. London. 1997.
- *The Sacred Animal Necropolis at North Saqqara, The Falcon Complex and Catacomb, the Archaeological Report*. Egypt Exploration Society. 2005.
- De Morgan J. *Carte de la nécropole Memphite, Dahchour, Sakkara, Abou-Sir*. Cairo.1897
- Devauchelle D. *Les stèles du Sérapéum de Memphis conservées au musée du Louvre, Egitto e Vicino Oriente* 17:95-114. 1994.
- Dodson A. *Bull cults*. In S. Ikram (ed.) *Divine Creatures, Animal Mummies in Ancient Egypt*.pp72-105. American University in Cairo Press. 2005.
- *Rituals Related to Animal Cults*. University of California, Los Angeles, *Encyclopedia of Egyptology* 1:1-8. 2009.
- *Afterglow of empire, Egypt from the fall of the New Kingdom to the Saite Renaissance*. Cairo. 2012.
- Emery W. B. *Preliminary Report on the Excavations at North Saqqara 1964–5*. *The Journal of Egyptian Archaeology* 51:3-8. 1965.
- *Preliminary Report on the Excavations at North Saqqara 1968-9*. *The Journal of Egyptian Archaeology* 56:5-11. 1970.
- Goudsmith J. and D Brandon-jones. *Mummies of Olive Baboons and Babbary Macaques in the Baboon Catacomb of the Sacred Animal Necropolis at North Saqqara*. *The Journal of Egyptian Archaeology* 85:45-53. 1999.
- Gozzoli B Roberto. *The Writing of History in Ancient Egypt during the First Millennium BC (ca. 1070-180 BC), Trends and Perspectives*. Golden House Publications *Egyptology* 5. 2006.
- Ikram S. *Divine creatures*. In S. Ikram (ed.) *Divine Creatures, Animal Mummies in Ancient Egypt*, pp.1-16. American University in Cairo Press. 2005.
- Jones M. *The Temple of Apis in Memphis*. *The Journal of Egyptian Archaeology* 76: 141-147. 1990.
- Kessler D. *Die Heiligen Tiere und Der Koning, I*. Wiesbaden, Harrassowitz. 1989.
- Kessler D. and N. AH el-Din. *Tuna al-Gebel, Millions of Ibises and Other Animals*. In S. Ikram(ed.) *Divine Creatures, Animal Mummies in Ancient Egypt*, pp.120-163. American University in Cairo Press. 2005.
- Kitagawa C. *The Tomb of Dogs at Asyut, Faunal Remains and Other Selected Objects*. Harrassowitz Verlag. 2016.
- Lloyd, A. B. *Chronology*. In A. Lloyd (ed.) *A companion to ancient Egypt*. Wiley-Blackwell. xxxii-xliii. 2010
- Malek J. *The Temples at Memphis Problems Highlighted by the EES Survey*. *The Temple in Ancient Egypt* 90-101. 1997.
- Malgorzata R. *Some Remarks on the Historical Topography of Saqqara in the Ptolemaic Period*. *Etudes*

- et Travaux 339-355. 2012.
- Mariette-Pacha A. and G. Maspero. *Le Sérapéum de Memphis, I*. Paris: F. Vieweg. 1882.
- Meyrat P. Topography-related Problems in the Apis Embalming Ritual. In J.F. Quack(ed.) *Ägyptische Rituale der griechisch-römischen Zei* 247-262. 2014.
- Myśliwiec K. *The Twilight of Ancient Egypt, First Millennium B.C.E.* Cornell University Press. 2000
- Nicholson P. T. The Sacred Animal Necropolis at North Saqqara, The Cults and Their Catacombs. In S. Ikram (ed.) *Divine Creatures, Animal Mummies in Ancient Egypt*, pp44-71. American University in Cairo Press. 2005.
- Nicholson P, J Harrison, S Ikram, E Early, and Y Qin. Geoarchaeological and Environmental Work at the Sacred Animal Necropolis, North Saqqara. *Studia Quaternaria* 30: 83-89. 2013.
- Nicholson P, S Ikram and S Mills. The Catacombs of Anubis at North Saqqara. *Antiquity*, 89: 645-661. 2015.
- Perdu O. Saites and Persians (664–332). In A. Lloyd(ed.) *A Companion to Ancient Egypt*, pp.140-158. Wiley-Blackwell. 2010.
- Ray J.D. *The archive of Ḥor*. Egypt Exploration Society. 1976.
- *The world of north Saqqâra*. *World Archaeology* 10:149-157. 1978.
- Stambaugh J. E. *Sarapis Under the Early Ptolemies*. Brill Archive. 1972.
- Smith H. S. Preliminary Report on Excavations in the Sacred Animal Necropolis. *The Journal of Egyptian Archaeology* 62: 14-17. 1976.
- Saqqara. In B. Helck and E. Otto(ed.) *Lexikon Der Ägyptologie*, pp.412-428. Harrassowitz Verlag. 1984.
- Smith H. S, C Andrews and S Davies *The Sacred Animal Necropolis at North Saqqara, The Mother of Apis Inscriptions*. Egypt Exploration Society. 2011.
- Spencer A.J. *Death in Ancient Egypt*. Penguin Books. 1982.
- Te Velde H. A few Remarks upon the Religious Significance of Animals in Ancient Egypt. *Numen*, 27:76-82. 1980.
- Thompson D. J. *Memphis under the Ptolemies*. Princeton. Princeton University Press. 2012.
- Zivie A. and R Lichtenberg. The Cats of the Goddess Bastet. In S. Ikram(ed.) *Divine Creatures, Animal Mummies in Ancient Egypt*, pp.106-119. American University in Cairo Press. 2005.
- 古谷野晃『古代エジプト都市文明の誕生』古今書院 1998年
- 近藤二郎 河合望「遺跡の重要性と保存管理の現状 メンフィス・ネクロポリスの概要」吉村作治編『科学研究費補助金基盤研究(S) エジプト、メンフィス・ネクロポリスの文化財保存面から見た遺跡整備計画の学際的研究報告集第1号』、早稲田大学エジプト学研究所、十九～三十九頁、2011年
- 周藤芳幸『ナイル世界のヘレニズム エジプトとギリシアの遭遇』名古屋大学出版会 2014年

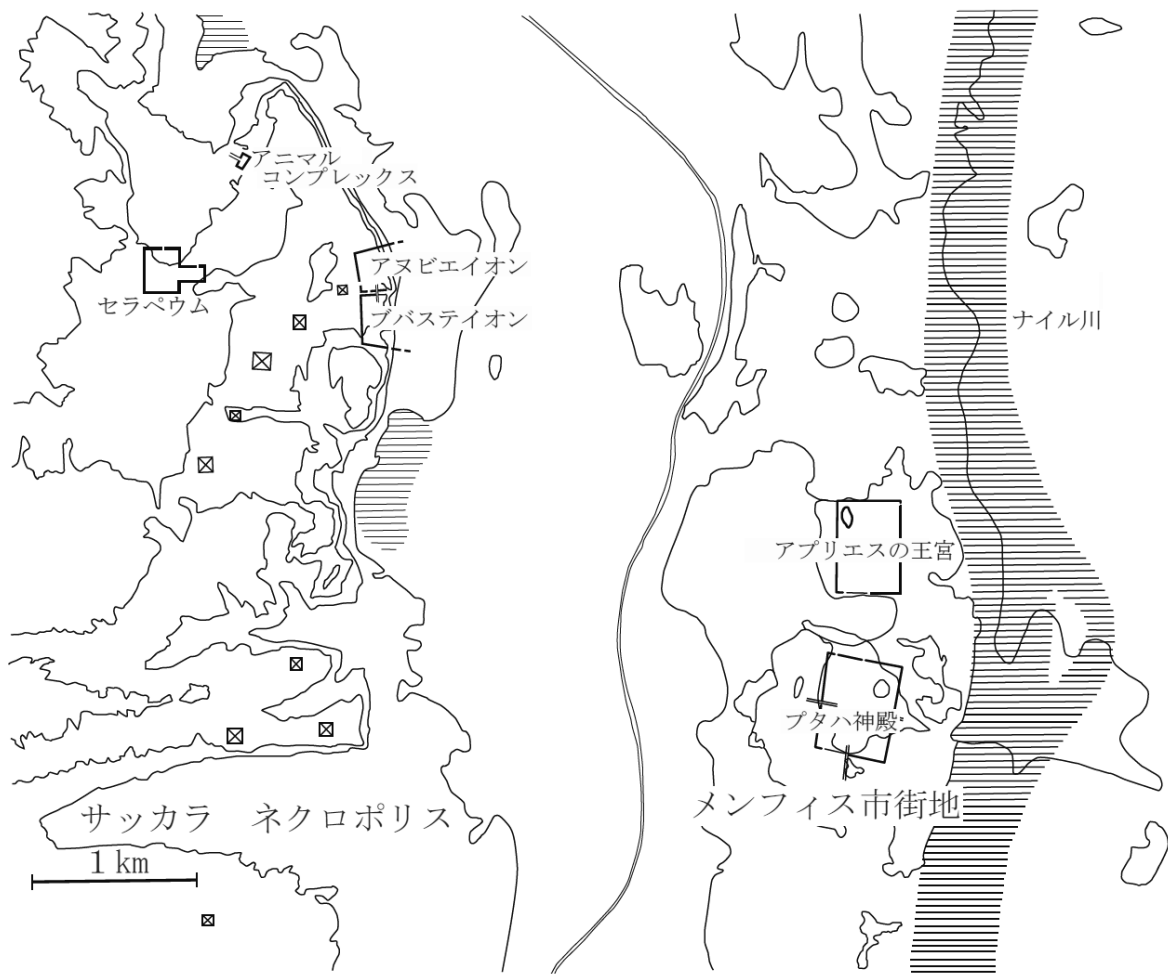


図1 メンフィス (Thompson 2012 Fig.1 再トレースおよび一部改変)

王朝区分	年代	王	王朝区分	年代	王
第26王朝	前664-610	プサンメティコス1世	第28王朝	前404-399	アミルタイオス
第26王朝	前610-595	ネコ2世	第29王朝	前399-393	ネフェリテス1世
第26王朝	前595-589	プサンメティコス2世	第29王朝	前393	アコリス
第26王朝	前589-570	アプリエス	第29王朝	前393-380	ネフェリテス2世
第26王朝	前570-526	アマシス	第30王朝	前380-362	ネクタネボ1世
第26王朝	前526-525	プサンメティコス3世	第30王朝	前362-360	テオス
第27王朝	前535-522	カンビュセス2世	第30王朝	前360-343	ネクタネボ2世
第27王朝	前522-486	ダレイオス1世	第31王朝	前343-332	アルタクセルクセス3世
第27王朝	前486-465	クセルクセス1世	第31王朝	前343-338	アルタクセルクセス4世
第27王朝	前465-424	アルタクセルクセス1世	第31王朝	前336-332	ダレイオス3世
第27王朝	前424-405	ダレイオス2世			
第27王朝	前405-404	アルタクセルクセス2世			

注：第26王朝はサイス朝と呼称されている。
 第27王朝は第1次ペルシア王朝である。
 第31王朝は第2次ペルシア王朝である。

表1 末期王朝時代(Lloyd 2010: xxviii-xxix による)

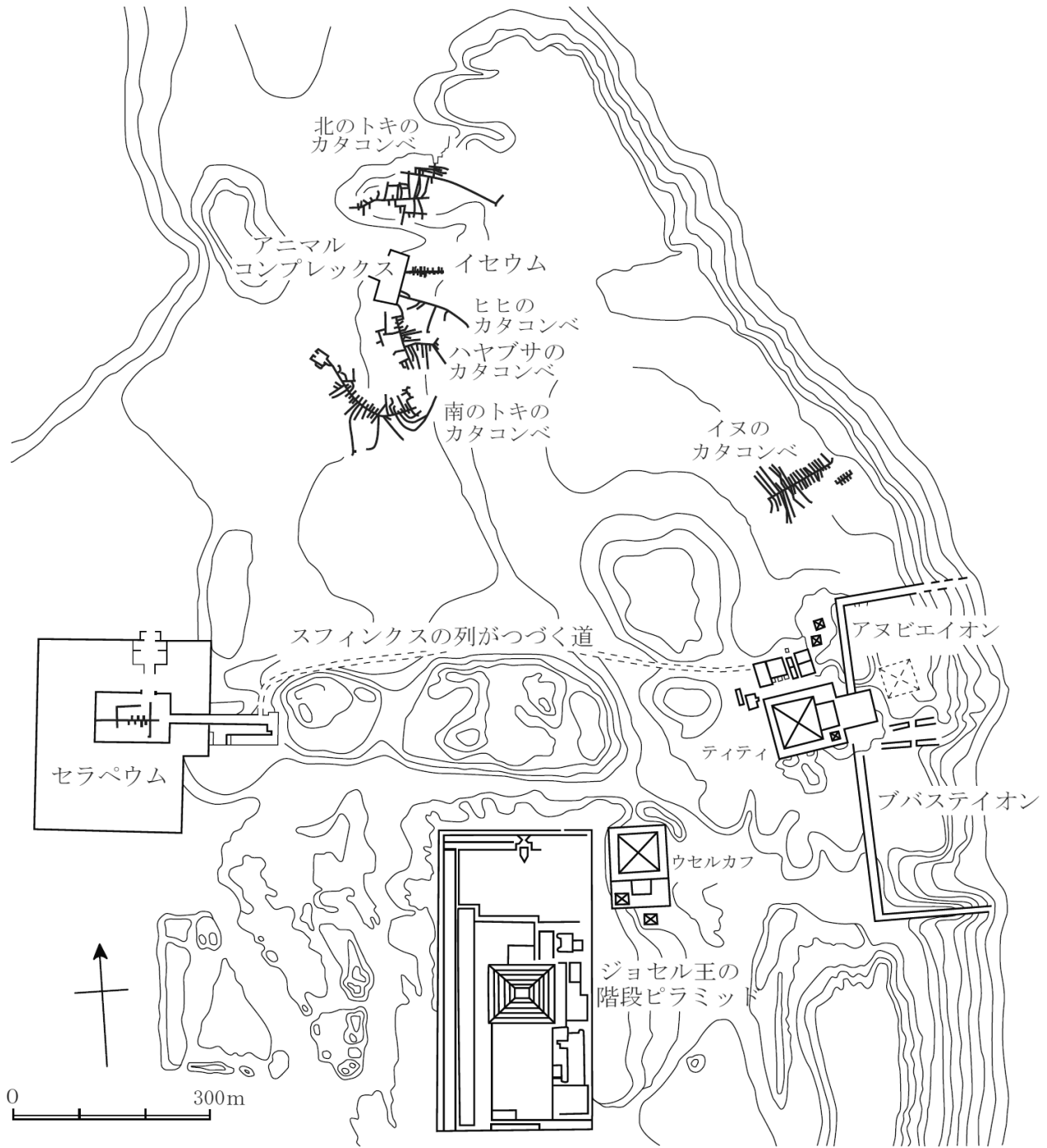


図2 サッカラ北部 (Nicholson et al 2013 Fig.1 再トレースおよび一部改変)